

No.2918

「リスクと保険の人類学：インドネシア共和国における国民健康保険・診療報酬体系の導入による医療標準化と医療実践の変化」

東京大学大学院  
総合文化研究科博士課程  
阿由葉 大生

近年多くの生活リスクや経済リスクが認識されるようになり、また、リスクマネジメントやファイナンスの技術も日々高度化している。インドネシアをはじめとする新興国でも、健康や老齢などのリスクに対応するため社会保障制度の構築が急務となっており、公的保険の整備が進められている。文化人類学分野においても、リスク社会という時代診断が普及して久しい。例えば、合理的なリスク思考の横溢にたいして、近代的な合理性によらない不確実性への対応実践についての民族誌研究を提示しようという問題意識などがある。

しかし、人類学的リスク研究においては、合理的リスク思考ではとらえきれない領域に注目するあまり、近代的なリスクマネジメントの実践そのものについての研究蓄積が少ない。そこで本調査では、インドネシアの国民健康保険制度を事例として、リスク・不確実性に関する記述的研究を行った。具体的な調査活動は、国民健康保険利用者へのインタビュー及び受診の現場での観察調査、一次診療施設でのインタビュー及び参与観察調査、社会保障制度設計について提言を行う国家社会保障審議会委員へのインタビュー及びその活動についての参与観察、国民健康保険を運営する機構へのインタビュー調査である。

これらの調査からは、当初は過小診療というリスクに対応して整備された保険が、利用者や医療提供者のモラルハザードという新たなリスクを明らかにしたこと、そして医療提供者、患者、保険者という3社の間で何をリスクとするのかが異なること、さらに過剰診療に対応するためのリスクマネジメントが、国民健康保険への信頼の喪失の可能性という数値化できない不確実性はらんでいることが明らかとなった。このことは、リスクと不確実性を対置するような従来の人類学的リスク研究にたいして、多様なリスクや不確実性をはらんだリスクという、リスクの複層性に注目することの重要性を示唆している(800字)。

以上